患者図書室／患者情報室の資料の選定に関する研究

池上英隆（いいなステーション）
北田淳子（阪南中央病院 患者情報室「とまり木」）
中馬良子（大阪厚生年金病院 患者情報室「ラヴェンダー」、医療機関内図書サービス「ito」）

近年、病院の中に「患者図書室」、「患者情報室」といった患者のための医療情報提供施設が設置され始めている。公共図書館の中にも「医療情報コーナー」を設けるところがある。市民・患者の医療情報ニーズにより、これらの動きは更に大きくなっていくことが考えられる。また、2007 年 4 月に施行されたがん対策基本法により、がん診療拠点病院の患者に対する情報提供機能が必要性を増してきていることも、このような情報提供場所の設置の動きを加速させるだろう。

しかし、このような医療情報提供施設の情報の「質」にはばらつきがある。書籍の数では多いところでは医学書 1000 冊以上を取り揃えている一方で、医療情報提供を謳っているものの一般書がメインとなっている施設もある。また、中身についても、医学事典や教科書などの専門向けの書籍、病気や検査について分かりやすく解説した市民・患者向けの書籍、闘病記やエッセイなどの読み物など、様々である。書籍以外にも、患者会資料、製薬会社のパンフレット、ビデオや DVD などの視聴覚資料など多くの種類での提供方法もある。

本研究では、各施設の資料データを収集し、その中から、多くの施設に置かれている資料、よく利用されている資料は何か、逆に足りない資料は何かを調査する。更に、その調査の中から、これから医療情報提供施設を作る際に一助となるような「役に立つ資料」はどんなものがあるのかを検討する。

方法は、郵送、及びインターネットによるアンケート調査によって行った。108 の施設を対象にし、内訳は病院の患者図書室等の医療情報提供施設が 98、公共図書館が 2、その他の施設が 8 であった。6 月 30 日現在で、55 施設からアンケートを回収し（回収率 51%）、うち 38 施設分が有効回答であった（有効回答率 35%）。

なお、本研究は NPO 法人ヘルスケア・リレーションズの助成により行われた。